

大水霊都市ウンディーネ





「私を精霊ではなく、一人の可憐な女性にして欲しい。あなたと一緒に、あなたの時間を生きたいの」

---

「ここが大水霊都市ウンディーネかあ。一度来てみたかったんだよなあ」

伊織(いおり)は大水霊都市ウンディーネを見渡せる広場にいた。この大都市は、水の女神ウンディーネの守護下にある、超巨大な魔法都市であった。

魔法都市と言いながら近代的なビルが立ち並ぶ。しかし、地面は水に覆われ、空気中にはバブルが浮いており、一見して水魔法が栄える都市であることが伺えた。

この大都市の象徴である精霊ウンディーネは、この町の汚染された水を浄化し、その莫大な魔力でありとあらゆる水の魔法を使うことができるという。

約 30 億年も昔、地球が誕生して何億年か経った後に、ウンディーネは誕生したという。それから現在まで、この大水霊都市ウンディーネのどこかで、この町を守っているそうだ。

しかし、ウンディーネは一般人には干渉できないと言われ、一般人もまた、ウンディーネを見ることできないそうだ。時々現れる精霊に干渉できる人間のみ、ウンディーネと会うことができると言い伝えられている。

「さて、せっかく観光でこの町に来たわけだし、観光スポット巡りでもしようかな」

伊織は別の都市からやって来た魔法使いであり、一応水魔法の使い手であった。しかし、この水魔法の栄えた大都市ウンディーネの魔法使いと比較すればまだ初心者であり、それもあって、この町に観光と勉強をしてきた。

「初めに、水魔法アクアリウムに行ってみようかな」

水魔法アクアリウムは、言わば水魔法の技術を磨き、それを見せあう水魔法コンテストに向けて練習する場所である。スケートボードをする人間がスケートボード場に行き、スキーを練習する者がスキー場に行くように、水魔法コンテストに出場する者もまたこの水魔法アクアリウムという練習場に行く。

「凄い！これが大水霊都市ウンディーネの魔法使いの力かよ！」

水魔法を使う少女が、高さ数十メートルにも及ぶ超巨大な水の塊を空中に浮遊させていた。水の魔法を使う際、扱う水の量が多ければ多いほど魔力を必要とし、形が崩れないように集中力も要するようになる。しかしこの少女はまだ幼いのにも関わらず、そんな大量の水をいとも簡単に扱っていた。

「まだ幼い子供なのに、この魔力量は驚いたなあ」



伊織はその後もしばらくこの水魔法アクアリウムにいた。水で形作った竜を操るものや、水に属性変化を加えて氷にする者もいた。さらには大量の水を水蒸気に状態変化させ、体積膨張により爆発を引き起こしている者もいた。

伊織はその水魔法の用途の広さに驚き、自分もこのような魔法使いになりたいとまで思った。

「水魔法アクアリウム、凄い面白かったなあ。ちょっと疲れたし、宿にでも向かうか」

伊織は宿に向った。しかし、その途中で尋常ではない魔力を感知した。

それは、先ほどまで水魔法アクアリウムにいた魔法使い達の比ではない。何十倍、何百倍、いや、測定不可能なぐらいの魔力量なのかもしれない。

伊織はその魔力に当てられて、魔力酔いをしてしまった。

「うっ、ちょっと気持ちが悪いかも。なんだこの魔力量は」

魔力を感じる方向に伊織は進んでいく。一体何者なのか。この異様な魔力は、この世界の魔法大臣に匹敵、いやそれ以上ではないかと思わせる程の量であった。

「君は？」

そこには、手で胸を隠し、お尻の割れ目をこちらに向けて座っている少女がいた。



「もしかして、私のこと見えるの？」

「もちろん見えるけど。というか、なんで全裸なんだ」

「肌を水に直接付けた方が、水魔法を扱い易くなるのよ」

ほとんど全裸で座っている白髪の少女は、伊織を興味津々に見つめている。

「ねえ、私のことどう思った？なんでこの場所に来たの？」

「異常な魔力量を感じたからだよ。君、一体何者なの？」

「私？そうだなあ。大水霊、ウンディーネって言ったら信じられない？」

「何？」

伊織はもちろんウンディーネという大水霊のことを知っている。この大都市の名前の由来でもあるし、火、水、土などの原始的魔法構成要素を司る精霊の1人である。

しかし、そのウンディーネが私であると彼女は言う。にわかには信じられない内容であったが、伊織は馬鹿な妄言と切り捨てられない理由があった。

「その魔力量、魔法大臣以上のものとお見受けするが」

「当たり前よそんなの。私は原始的魔法構成要素である水を司る精霊よ。その精霊の真似事をしている人間の魔法なんて、比較になる訳ないじゃない」

「信じられないが、妄言だと切り捨ててもできない。何か証明できるものはないのか」

「私もあなたに興味があるから、信じいて欲しい。だから、こんなのを見せてあげる」

ウンディーネと名乗ったその少女は、この町に満ちた水に触れた。その瞬間、伊織を含め、ありとあらゆる水魔法の使い手に干渉できる程の魔力が光速でこの大都市全体に広がったのが分かった。

そして伊織が先ほどいた水魔法アクアリウムの方をちらっと見た。すると、水魔法で作られた超巨大なバルーンや竜が空中で粉碎し、辺りにその水しぶきが飛散したのが遠目に見えた。

「なんだこの力は」

「水魔法に私の精霊の力を干渉させて、魔法ディゾルブを行ったのよ。私の魔力に触れたものは、強制的に水魔法を扱う権限を失い、私にそれが移るわ」

「それで、水魔法アクアリウムにいた魔法使い達は、一瞬、魔法を使えなくなったのか」

「どう？これが大水霊ウンディーネの力よ」

ウンディーネとなのった少女は、その圧倒的な力を伊織に見せつけた。

「私が見えるなんて嬉しい。私はずっと一人で寂しかった」

「ウンディーネのことを見える人間ってそんなに少ないのか」

「私はもう 30 億歳になるけど、今まで数人しかいなかったわよ」

ウンディーネは地球が誕生してしばらくして生まれた原始精霊である。そのため、30 億年もの間この地球で生きていることになる。しかし、その長い年月の間でウンディーネのことを見える人間は数人しかいなかったと言う。

「珍しい子。本当に嬉しい。ずっと寂しくて、一人でこの町を支えてきたの」

少女は長年の寂しさが伊織と喋ることで急激に安らぎ、嬉しさの余りウンディーネは伊織に抱き付いてきた。

「よかった、私が見えるあなたに会えて」

「そんな、急に抱き付いて。寂しかったんだな」

伊織は急に抱き付かれて驚いたものの、30 億年という長い間一人で過ごしてきたウンディーネに同情してしまい、彼もまた少女を軽く抱きしめた。

すると、伊織は少し興奮して、彼のペニスが勃起してしまった。

「あっ」

「いいよ、気にしないで」

ウンディーネは伊織のペニスが膨れていることに気が付いたが、気にしないで伊織に優しく諭す。そしてしばらくウンディーネが人間の温かな感触を確かめるように伊織を抱きしめ続けたが、伊織のペニスは全裸女性への興奮で次第に大きくなっていき、ウンディーネの身体に、ズボンを挟んで間接的にはあるが触れてしまった。その瞬間、

「あ、なんだ！？気持ちいい！」

伊織の睾丸の中に蓄えられた精液が流動しはじめ、急に快楽がペニス全体を覆い、射精してしまった。ズボンの布生地を貫通して、どろどろと精液が生地に浸透していった。

「あ、ごめんなさい、興奮させてしまって。私もあなたに会えた喜びで興奮して、水魔法の制御を怠っていたら、あなたの精液に干渉しちゃって精液がペニスから出てしまったみたい」

どうもウンディーネは嬉しさの余り我を忘れて、水魔法の制御を怠ってしまったらしい。伊織のペニスが少女の身体に触れた瞬間、彼の精液に干渉され、興奮がペニス全体を包み込んで、強制射精させてしまったらしい。

「ごめん、ズボン汚れちゃったみたいね。でも大丈夫。水系統の汚れは私の力ですぐに浄化できるから」

「いいよ、気にしないで。正直、ちょっと気持ち良かった」

「本当！？嬉しいかも。恥ずかしいけど、また気持ちよくなりたい時は言って、またやってあげる」

ウンディーネは慎重に彼のペニス付近を手で触れて、水魔法をかける。精液が染み出て汚れてしまったズボンはすぐさま浄化され、元通りの綺麗な状態に回復した。

「ズボンは綺麗にしといたから」

「ごめん、急に興奮しちゃって」

「いいのよ。私はそれより、ずっと一人で何億年も過ごしてきたから寂しくて。あなたに会えた喜びでいっぱいなの」

ウンディーネが静かに泣いているのが分かった。何億年も一人で過ごしてきた彼女の苦しみは相当なものだったらしい。彼女の手は今も伊織の手と絡み合い、離さないように恋人繋ぎをしている。

「もっと伊織君と話したい。せっかく会えたんだ。私を一人にしないで」

「もちろん、一緒にいていいよ」

「良かった、伊織君、本当にありがとう。ちょっと急になんだけど、この町と一緒にデートしてみない？」

「楽しそうだね！いいよ、行こうよ」

伊織とウンディーネはこの大水霊都市ウンディーネを一緒に回り、デートを行うことにした。ウンディーネはこの町のことを誰よりも詳しく知っているらしく、超巨大な噴水スポットや、ガラス張りの水中トンネル等、観光スポットを伊織と歩き回った。

ウンディーネは純粋に伊織とのデートを楽しんでいた。しかし、どこか儂げな顔をしており、もの悲しさが伊織に伝わってきた。

「どうしたの？なんか寂しそうに見えるけど」

「いや、実は伊織君に話したいことがあって」

「僕に話したいこと」

「そう。私はずっと人間に憧れているの。ずっと人間になりたいかった。そして同時に精霊のままいた方がいいのかなとも思ってるの」

「どうして人間になりたいの？」

「詳しくは言えなの。ごめんなさい」

ウンディーネは人間に憧れを抱いていると伊織に伝える。その理由はどうも伊織には話したくないらしい。

「私が人間になる方法はあるけど、今まできっかけを掴めなかった」

「ウンディーネが人間になる方法？」

「うん。それは、実はあなたのような存在なの」

「僕のような存在？」

「うん。実は、私の事を見える人間と子供を作ることで、精霊としての力を失い、人間になることができる」

ウンディーネは人間になる方法を伊織に話した。どうも、彼女の事を見える人間とセックスをして子供を作ることで、精霊ではなく人間になれるようだった。

「私は人間になって、欲しいものがあるの。だけど、その欲しいものが私を精霊でいたいと思わせる原因でもあるのよ」

少女は人間になって、あるものを求めているようだった。しかし、その求めるものは、精霊でいたいと思わせる原因でもあるという。

伊織にはその内容について話してくれないらしい。

「欲しいものについては教えてくれなくてもいいよ。人それぞれ、色々願望があるものだよ」

「ありがとう、伊織君。ただ、私はあなたに凄い興味があるの。もしもあなたが私の事を好きになって、セックスをして子供を作り、幸せな家庭を作ったら、どれだけ幸せなのかって」

「ウンディーネとの幸せな家庭……」

「今すぐに決断しなくてもいい。だけど、私はずっと寂しくて、あなたを手放すなんて考えられないの」

ウンディーネは少し泣きながら、伊織の手を強く握った。少女の手は必死に伊織を繋ぎ止めようとしている。

それから、しばらく2人は口数が減ったものの、楽しくこの大水霊都市を観光し、幸せな時間を送った。

「伊織君、今日、凄い楽しかった」

「僕も、ウンディーネと一緒にいれて幸せだよ」

ウンディーネは今日、伊織と幸せな時間を過ごすことができた。しかし、同時に不安であった。伊織が少女のことを忘れて、その後再び会うことができず、また何億年も一人で生きることになるのではないかと。

少女がそのように、これからの寂しさに不安を感じた瞬間、伊織のペニスに手を当てた。

「どど、どうしたのウンディーネ!？」

「ごめんなさい。やっぱり私、あなたと離れ離れになってしまうことが怖い。一度離れて、もう帰ってこなかったら私、また何億年も一人寂しく精霊として過ごすことになるわ」

「大丈夫だよ、そんなことしない」

「ありがとう。だけど不安なの。だから私、今ここで、人間になってずっと欲しかったものを手に入れることにした。伊織君、ごめん」

ウンディーネは伊織のペニスに触れた手に魔力を吹き込み、その瞬間、伊織の睾丸が激しく脈動する。

「なな、何してるの!? あ、あ、気持ちいい……」

「どう? 私に発情してきた?」

「ああ、ウンディーネ、ウンディーネ! 気持ちいいよ」

魔力が伊織のペニスと睾丸の中の精液に干渉し、脈動する。その刺激が彼のペニス全体を刺激し、ウンディーネへの発情を促す。大水霊ではなく、色欲の魔女のように伊織の性的興奮を高める。

「もう我慢できないよ、ウンディーネ」

「我慢しなくてもいいんだよ伊織。気持ちよくなりなさい」

ウンディーネの魔法により性的興奮を抑えられなくなった伊織は、彼女をなぎ倒しはじめた。2人は水に満ちたこの大都市の野外で性行為に及んだ。ウンディーネの水魔法により、空気中に水のレンズを作り、外からは2人の性行為が見えないようになっている。

「もっと股を開いて僕に見せてよ」

「ああ伊織、そんな開いちゃダメだよ」

伊織はウンディーネを寝かせ、足を M 字にさせて股を開く。彼女のまんこが露出する。彼女のクリトリスに優しく触れて愛撫する。



「伊織、気持ちいよ」

「ほら、こんなにクリトリスが大きくなって。もっと興奮させてあげるよ」

伊織は彼女のまんこに優しく口づけをして、クリトリスを舐め始めた。ゆっくり舌の上で転がすように刺激をあたえると同時に、彼女の膣は濡れ始め、愛液が滴り落ちた。

「伊織もそんなにペニスを勃起させて。私も舐めたあげる」

ウンディーネは伊織の大きなペニスを口いっぱいにはおぼり、前後に動き、亀頭を刺激する。

伊織のペニスはますます大きくなり、膨れ上がり、血管が浮き出始める。亀頭が口の粘膜と舌に包まれ、尋常ではない快感がペニス全体を覆う。

「ウンディーネ、気持ちいよ」

「伊織、もっと気持ちよくなって、ほら、ここが気持ちいいでしょ」

「ああダメだ、そんなに刺激したら」

ウンディーネは伊織の肛門付近と睾丸を同時に刺激しながらフェラをする。ペニス、睾丸、肛門に快感が突き抜け、ペニスからは我慢汁が出て止まらない。

「ウンディーネ、今度は僕が気持ちよくさせてあげるよ」

伊織はウンディーネを押し倒して寝かせる。彼女は恥ずかしそうに内股で女性器を隠す。しかしそれを無理やり広げて、露わになったまんこに自身のペニスを優しく挿入した。

「もっと、もっときて、伊織」

ウンディーネの合図に合わせて、伊織は激しく動いて彼女のまんこを刺激する。動くごとにちゅぱちゅぱと音を立てて愛液が飛び散る。

「もうダメだウンディーネ。我慢できない。激しくするよ」

「いいよ、もっと私のまんこにあなたのペニスをぶつて。激しく刺激して、もっと気持ちよくさせて」



先ほどよりも激しくペニスとまんこがぶつかりあう。彼女は気持ちよさのあまり、時々潮を吹いて伊織の下腹部を濡らす。

ウンディーネの腰はがくがくと震えて、肛門は激しく収縮している。異常なまでの快感が肛門からまんこ、クリトリスへと突き抜け、彼女の顔は絶頂時そのものであった。

「伊織、伊織、好きだよ、もっと激しいセックスしたいよお。今度は私が伊織をリードしたあげる」

ウンディーネは伊織を横に寝かた。伊織のペニスははちき切れそうなくらいに勃起して直立している。その横になった伊織にウンディーネは後ろ向きで乗っかり、上下に動き始めた。

「ああああ、ウンディーネ、そんなに動いたらイッちゃうよ」

「私も気持ち良くて、ああ、こんなに愛液を垂らして。肛門も大きく開いて、絶頂が止まらない」

2人はその態勢のまま互いのペニスとまんこをぶつけ合い、刺激しあった。両者の性器は充血し、愛液と我慢汁が絡み合い、2人は不思議な温かな一体感に包まれ始めた。

「もうイキそうだよウンディーネ」

「私もイキそう。愛液も止まらない。ああ、伊織、私の中にあなたの精液を出して、出して、出して！」

「ごめん我慢できない。イクよ、ウンディーネェ！ああ、イクッ、イクッ！」

「伊藤、イッていいよ。私を孕ませて！子宮の中まで精液を出してえ！」

伊織のペニスはドクンと脈動し、精液が勢いよく飛び出した。ウンディーネは精液を絞りとるように女性器に力を入れて膣口でペニスを締め付ける。その後、彼女は腰を持ち上げ、彼の尿道に残った精液をまんこで絞り上げた。伊織のペニスがまんこから抜け、ビクンビクンと揺れる。ウンディーネのまんこは激しく痙攣し、腰はがくがくと震えている。さらに、彼女の性器からは精液がゆっくり滴り落ち、肛門の方へ流れ込んだ。



「気持ち良かったね、ウンディーネ」

「伊織、今日から家族になっちゃうかもね。最高のセックスだったわ」

-----

ウンディーネと伊織はその後、正式に交際し、2人の子供を授かった。子供達はウンディーネの魔力を引き継ぎ、優秀な水魔法使いへと成長していった。

子供ができたと同時に、ウンディーネは精霊としての権限を失い、純粋な一人の可憐な女性となった。

「ウンディーネ、今更だけど、本当に僕と結婚してよかったの？」

「なんでそんなこと言うのよ」

「だって、セックスして子供ができたことは嬉しいよ。だけど、ウンディーネは大水霊としての力を失って人間になっちゃうんだよ」

「いいのよ。私はそれを望んだの」

ウンディーネは伊織と出会った時、人間に憧れるという欲求と、精霊のままでいたいという願望がせめぎ合い、心に葛藤を生み出していた。彼女は伊織に、「私は人間になって、欲しいものがあるの。だけど、その欲しいものが私を精霊でいたいと思わせる原因でもあるのよ」と言った。

それが何なのかは伊織には教えてくれなかった。

しかし、30億年もの間一人で寂しく生きてきたウンディーネは、伊織との出会いをきっかけにして人間になる決意をして、2人は幸せな家庭を築き上げた。

「そういえば、伊織。あなたに私が人間になりたかった理由を教えてなかったわね」

「そう言えばそうだったね」

「知りたい？」

「うん。なんでこんな僕とセックスをしてくれて、愛してくれて、こんな幸せな家庭を作ってくれたのかも含めて、教えて欲しいかも」

ウンディーネが伊織に、自分が人間になりたいと考えて迷っていた理由を話し始めた。

「私は有限の時間で、人と恋をして、愛し合い、家族を作り、未来に繋ぎ、幸せな人生を送ることに憧れていたの」

「有限な時間？」

「そうよ、伊織。私は 30 億年もの間、大水霊として生きてきた。それが人間になるってどういうことだか分かる？」

「人間になる、どういうことだろう？」

「もう、伊織ったら鈍感ね。あなたの寿命は後どれくらいかしら」

「僕は今 30 代だから、80 歳で死ぬとして、あと 50 年くらいかな」

「私は大水霊の権限を失い、人間になった。あなたを愛して、子供を作った。その私は、人間同様に後 50 年程度の寿命しかないのよ」

伊織は愕然とした。30 億年もの間大水霊として生きてきたウンディーネには、寿命が存在していなかった。しかし、人間になることで人間の肉体が与えられて、寿命も精霊とは比較にならない程短くなる。それに伊織は今初めて気づいたからだ。

「そんな、ウンディーネ。君は僕と幸せな家庭を作ることで、自分に寿命という概念が付きまとうようになることを知っていたのか」

「言ったでしょ。私は人間になって、欲しいものがあるの。だけど、その欲しいものが私を精霊でいたいと思わせる原因でもあるのよって。その欲しいもの、それが寿命なの」

「なんでだよ。こんな僕なんかと幸せになることで、大水霊が持つ無限の命を捨ててしまうなんて」

「勿論迷ったわ。でも、私は 30 億年もの間、一人で苦しかった。寂しかった。辛かった。寿命のない私はこの苦しみを、後何億年、何兆年、それ以上もこれから味わい続けたいと思わないと思うと、激しい嗚咽が私を襲い、不安で眠りもできなかった」

伊織はウンディーネのこれまでの苦しみが想像を超えるものであると知った。もしも自分が無限の命を持っていて、恒常的な苦しみが終わりなく続くとしたらどうだろうか。考え

るだけでも恐ろしい。

「私は無限の命が憎かった。だけど同時に、人間になることで経験する死という出来事も怖かった。だから、人間に憧れる理由である寿命は、私に薄っすらと死の不安を持たせ、大水霊でいた方がいいとも思わせる要因だった。だけど、あなたと出会って、死の恐怖は全く消えてしまった」

「僕と出会って？」

「そう。無限に続く苦しみから解放されて、あなたと幸せな家庭を作って、有限の命を授かり、伊織のために使って愛し合いたい、そう思ったの」

ウンディーネは大水霊の無限の命を捨て、寿命を獲得し、有限の命を伊織と愛し合うために使うことに決めたのだ。人間は最後には死んでしまう。彼女はそれに憧れ、同時に恐怖した。

しかし、その恐怖は伊織と愛し合うことで安らぎ、無限の苦しみの恐怖から解放された安堵がウンディーネを支配し、同時に有限しかない大切な時間を、伊織に捧げて生を享受する活力を得た。

「僕はウンディーネと幸せになれて、本当に嬉しい。子供もできて、優秀に育ってくれた。ちょっと恥ずかしいけど、君と愛し合う夜のセックスも、毎回僕を本気にさせてくれて、本当に毎日が充実なんだ。だけど、無限の命を捨てるぐらいの価値が僕にあったのか、そう考えてしまう」

「何を言ってるのよ、もう。私はあなたに救われたの。自分の無限の命への固執を解き放ち、有限しかない時間を、有限だからこそ大切にあなたと愛を育まないといけないと思わせてくれた。

私は今、30億年以上の人生の中で、最も幸せよ」

「ウンディーネ、こんな人間の僕に、君の命を燃やしてくれるのかい」

「私ももう人間よ。あなたと同じ、有限の時間を生きる者。大水霊とは違い、無限には生きることのできない弱い存在。だけど、有限しか命がないからこそ、今あなたと過ごす時間を貴重なものと思えるの。

私はこれからも、伊織を幸せにし続け、子供の成長を見守り、人生を全うする」

ウンディーネは伊織を優しく抱きしめる。そして口づけをした。

「後数十年の命だけど、この止まらない愛を、あなたに注ぎ続けたい。私をもっと抱きしめて。生を実感させて」

「僕も好きだよ。こんな人間の僕を本気で愛してくれてありがとう。大好きだよ、ウンディーネ」

2人はこの後、何十年にも渡り愛を育み続け、幸せな家族と共に生きた。

ケンカをしたこともあった。言い合いになったこともあった。だけど、結局は自分から言い過ぎたと謝り、仲直りし、愛情が途絶えることは決してなかった。

そして時は訪れた。81歳の夏、伊織はこの世を旅立った。

ウンディーネは泣きじゃくった。最愛の夫が他界し、彼の遺体を何時間も抱きしめ続けた。

しかし、それから5か月後、ウンディーネにも死の瞬間が訪れる。伊織の死から数か月という短い時間の後に、ウンディーネもそれを追うように死へと導かれる。

だけど何故かウンディーネは嬉しそうな顔をしていた。今にも死ぬ寸前という彼女の手には、自分の子供と孫の写真が握られており、さらには、伊織との幸せな時間を記録したアルバムがそこには存在した。

最後の力を振り絞って、彼女はその写真に顔を向ける。

子供達にありがとう、そう呟いた。

孫達に、これからの未来をよろしくお願い、そう呟いた。

そして最後に、伊織との2ショット写真を眺めて言った。

「今から会いに行くからね。あなたを一人にはさせない。孤独の寂しさを、私は誰よりも知っているから。

あなたを心から愛しています」

30億年も生に苦しめられてきたウンディーネは、最後の最後で数十年の愛に溢れた時間を過ごし、天国にいる伊織の元へと旅立った。